

しあわせの島

松田妙子

世界中が「フクシマ」に注目している今。「幸福の島」を意味する地名であったはずの地域が置かれている現状に、限りない痛ましさを覚えます。

小学校四年の時の国語の教科書に載っていた、「しあわせの島」という物語を思い出します。大体こんな

お話です。——ある所に、怠け者ばかりが住む島がありました。誰も働かないので、人々は衣食にも事欠く生活をしながら、不平ばかり言っていました。ある時島の長老が、「皆でしあわせの島へ行こう」と、言い出しました。海の彼方に「しあわせの島」と呼ばれる島があり、そこでは作物がたわわに実り、人々は良い服を着て立派な家に住み、幸福に暮らしているのだと。村人たちは大喜びでその話に乗りました。長老の指示通り、長い航海に備えて十分な食糧や衣服を蓄え、頑丈な船をこしらえて、いざ出発というその時。当の長老が死んでいるのが発見されました。こんな手紙を残して。「お前たち、しあわせの島へ行くために一生懸命働いて、この島は豊かになっただろう。もうどこへも行く必要はない。ここが、しあわせの島なんだよ。」そして村人たちは、その事実気づいたのでした。



この話を担任の○先生が脚本にして、学芸会で劇として上演しました。○先生はまだ若い男性教師でしたが、いわゆる文学青年だったのでしょう。作文の指導にも熱心でした。以前このコラムにも書いた、「僧は推す月下の門」の逸話を教えて下さったのもこの先生です。「春秋に富む」という言葉も教えて下さいました。「これからたくさんの春や秋を迎える、つまり未来がたっぷりあるということだ。君たちのことなんだよ。」と。そう言われた時、○先生は私たちにどんな未来を託しておられたのでしょうか。

東日本大震災の直後、避難所からの中継で、子どもたちがテレビカメラに向かってピースサインをしているのを見て、何かほっとするような気分になったのは、私だけではないでしょう。子どもはやはり大人にとって希望なのだ、と、子ども嫌いの私でさえ、そう思います。未来を継ぐ者たち。我々よりずっと、「春秋に富む」はずの者たち。その子どもたちに、大人はさまざまな夢を託します。あんな人になってほしい、こんな人になってほしい、と。その願いは時に対立します。

いわゆる「教科書問題」もその一つ。侵略戦争を美化するなどして、戦争のできる国作りへと、子どもたちを導こうとする教科書が作られているから、そんな「危険な」教科書を採択させまい、という声が挙がっています。私も一部を見本で見て、「なるほどこれは問題かも」と思いました。と同時に、こんな教科書を作る側も、「子どもはこう育ててほしい」と真摯な願いをこめている点では、それと対立する側の人々と変わりはないだろう、と思いました。子どもの手を両側から大人が引っ張って、それぞれが正しいと信じている方向へ連れて行こうと争っている、そんな図が頭に浮かびます。

私が小学校四年の教科書で見た「しあわせの島」にも、当時の大人たちが子どもに託した願いがこめられていたのでしょう。幸福は身近

な所にあるんだよとか、労働の尊さとかに気づいてほしいといったような。でも続けて雷雨と地震に見舞われた日、私はふと、この思いました。——この日本列島は、地震や津波や台風などの自然災害の脅威に絶えずさらされている。しかも放射能汚染の恐怖まで加わった。それでも私たちは、ここを捨ててどこにも行けやしない。ここが「しあわせの島」だから、よそに幸福を探しに行く必要がないというわけじゃない。よしんば「しあわせの島」であったとしても、私たちに幸せをくれるものは、同時に不幸をもたらすものでもあるのだ。

同朋新聞に、「いついのちを奪いに来るかもわからないものによつてのみ、いのちは支えられているんだなあ」という言葉がありました。ここでは、病を引き起こす人間の体を指しているのですが、考えてみれば、体の外にあるものも全部そうです。私たちの体も心も、それを支える大地も水も空気も、「いついのちを奪いに来るかもわからない」ものばかりです。そんな中で、私は私のいのちを頂いて、生かされているのだということ。

歴史の教科書には今、阪神淡路大震災がもれなく載っています。今年の東日本大震災も、間違いなく後世の歴史に残るでしょう。その時私たちは、どんな社会を作っているのでしょうか？生かされた私たちは、「春秋に富む」後の世代に、何を残せるのでしょうか？

2011、7、10、9PM*

「いのちつながる資金」前田真吹さんからの「報告を頂きました」

皆さまからお預かりした「東北関東大震災いのちつながる資金」の使途の「報告をさせていただきます。④以外映像に登場された方々です。」

- ①ペイ・フォワード郡山 ②被災地障がい者支援センター福島 ③NGO 心援隊
 - ④NPO NPOの被災者雇用創出事業「キャッシュ・フォー・ワーク」プロジェクト
- これは：被災者の方を雇用し、他の被災された方々の「自宅の床下クリーンアップ」等を行い、「自宅に早く戻れるよう、お手伝いする事によって、職を発生させる、プロジェクトです。被災した地元の人々が尽力のプロジェクトです。

⑤森さんの農園 1万円を、被災の「お見舞い金」として。

⑥銀河のほとりに、物資支援 上記①～⑤の残りのお金を使って、「果物」を送ります。

チエルノブイリでは、子どもたちの放射能を排出させるのに、生の果物が、かなり有効だったそうです。銀河のほとりにでも講演されたチエルノブイリへのかけはしの野呂美加さんは、各地の講演で今この事を発言されていて、チエルノのお母さんと子どもたちにせがまれ、果物を、せつせとチエルノに運んできたそうです。「銀河のほとりに」は、情報を求めるお母さんやお子さんがたくさん集まる所なので、果物を送ってみよう、と思いつきました。以上、合計 4万7千円 光円寺、山陽教務所で出逢った皆さま、東北で、出逢った皆さまを繋げていただき 新たな光のご縁が 生まれますように：：そんな祈りをこめて：：。

七組ワンコイン上映会で集まったカンパは当日観ていただいた二本松の除染映像を作成された畠山浄さんのプロジェクト「こどものたべもの基金」に六万五千円、長田浩昭さんの福島のこどもたちの保養のための基金に六万五千円を山陽教区第七組より寄付しました。七月十一日ピースチエーンはりまで募金活動 五千円を「ふくしまキッズキャンパ」へ。

その他仙台仏青へ食品、生活物資、絵本、鞆など。「こども福島情報センター」「負けねど飯館」活動支援金「ふくしまキッズキャンパ」に合わせて四万五千円の寄付をいたしました。全て、人と人がつながった所に活かされ、直接被災した方へと届くカンパです。

皆さまのお気持ち、「協力に心より感謝いたします。」